

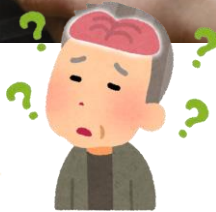


私たちは「記憶の苦手」＝「認知症」と考えがちですが、認知症は短期記憶の障害だけではありません。「ご本人」と「介護者」の「世界観の違い」を3つのパターンから比べてみましょう。



認知症になるとどう感じるの？

認知症の人



行動



ケアする人

「まだ聞いてない」
「忘れそうなので忘れないようにしよう」

同じことを言ったり
聞いたりして繰り返す

「代わりに覚えておくね」
本人の努力を理解し、
言葉を変えたり安心して
いいよと伝える

「単語がわからない」
「会話の速度が速い」

相手の話を
理解しにくい、
話についていけない

「ゆっくり話す」
身振りや手振りを使って
伝える。2・3語ほどの
言葉で話す

「また見つからない
相談して助けを…」
「いつもと違う反応？
まさか…」

財布がない…
あなたが
盗んだ!?

「一緒に探そう」
不安やさみしさなどの
感情を汲み取る
ことが大事

「認知症の人が見ている世界」に寄り添い、誰もが自分らしく、安心して暮らせるようにしていきたいですね。

「認知症界のレジェンド」 長谷川和夫さん

認知症医療とケアに多大な功績を残した、精神科医の長谷川和夫さんが昨年亡くなりました。認知症に関する国の政策がまだなかった1960年代後半から研究と臨床に携わり、「長谷川式認知症スケール(HDS-R)」を作成したことで知られています。2017年には自らが認知症になったことを公表していました。そんな長谷川さんが日本人に伝えたいことを詰め込んだ、こちらの本を今回ご紹介します。



長谷川和夫 医師
猪熊律子 読売新聞編集委員

ボクはやっと
認知症の
ことがわかった

自らの
認知症に
なった専門医が、
日本人に
伝えたい遺言

大反響!
12万部
突破

予防策や歴史的経緯から、
社会・医療が果たす役割まで、
認知症のすべてがここにある。

「長谷川式スケール」
開発者の眼には
いま、どんな世界が
映っているのか?

認知症への考え方が
変わった。

言葉が心に響き、
学びになりました。

心は生きている・・・
大切にしたい言葉。



これまで何千人もの患者を診てきた長谷川さんは、認知症になって何を思いどう感じていたのか。自身の半生や生き方、認知症の歴史に触れながら、日本人に伝えたい「遺言」を語る。『読売新聞』連載を加筆し書籍化。

【「TRC MARC」商品解説】